

官令

○大政官令第四號 前右大臣岩倉具視本日午前七時四十五分薨去ス 右告示候事 明治十六年七月二十日 太政大臣三條實美 官省院廳所來八月一日開廳ス 官告示候事 明治十六年七月二十日 司法卿大木喬任

諸達伺公報

○太政官院外 官省院廳所來 前右大臣岩倉具視薨去ニ付本日ヨリ三日間廢朝被仰出候條此旨相達候事 明治十六年七月二十日 太政大臣三條實美 ○太政官院外 陸軍省、海軍省、司法省 前右大臣岩倉具視薨去ニ付本日ヨリ三日間廢朝被仰出候條此旨相達候事 明治十六年七月二十日 內閣書記官

時事新報

前右大臣岩倉具視公薨去ス 明治十六年七月二十日午前七時四十五分前右大臣從一位大勳位岩倉具視公薨去ス公近年健康ト全ナラス然レモ尙ホ王事ニ勤勞ノ一日モ怠ルコト今春來病體ノ病ニ惱ミ其病症甚ク宜シカラザルヲ以テ醫師ノ勸告ニ從ヒ熱海溫泉等閑靜ノ地ニ就テ養病アリシト雖モ若シキ効驗ナシ五月東京宮殿御存御用ヲ以テ同地ニ赴キ滯在中病勢遽カニ差重モリタル處ニ 歐聞ニ達シテハ御慰問且ツハ病氣診察ノヲ態々待醫差遣ハサレタル程ナリシガ病ノ間ヲ得テ六月二十八日無事ニ東京ニ歸着シ祝田町ノ私邸ニ在テ養病アリ然レモ病勢減退ノ様子ナキヲ以テ公私上下ノ人々危懼一方ナラス看護兼養遣ハサント雖モ未ダ其効ヲ見ス七月五日 聖上ハハ大臣ノ薨幸セラレ親シク病體ニ蒞マセテラレテ懇問アリ同十二日ニハ皇后宮邸御行啓アリテ親シク病容ヲ御尋問アリ爾後病勢大ニ快方ニ向ヒ熱度モ退キ食氣モ進、餘程平穩ノ容體ニ移リタル由ナリシガ去ル十八日夜ニ熱氣消長甚ク身體疲勞ヲ覺エ漸ク危篤ノ容體ト變シタリ此以前ヨリ公ニハ病弱療養ノヲ久シク勸觀ヲ欠キ機務ヲ曠クスルコト憂慮シ上表シテ現職ヲ辭セシムコト懇請止マザルヲ以テ 聖上ニモ其志ノ切ナルヲ察シ玉ヒ一昨十九日特旨ヲ以テ其請ヲ允シ願ニ依テ本官右大臣ヲ免ス但シ座次ハ舊ノ如クシテ下下アリ同日ハ再々同邸ニ臨幸アリテ親シク病體ニ蒞マセテラレテ甚ク衰弱ノ容體ナレハ殊更懇問アリ然ルニ越テ一日昨二十日午前七時四十五分ニ至リ 然長逝シタリト聞エ上 聖天子ヨリ下朝野ノ士民ニ至リマテ悲歎ノ涙ニ暮レコレヲ惜マサルハナシ悲シト哉 公ノ履歷ハ維新前後ニ互リ其事甚ク長ク退々ニ詳記スベシケレモ取敢ニズ左ニ其大要ヲ記サシム 公ハ故正三位參議兼右近衛權中將岩倉具慶ノ男ニシテ文政八年九月十五日京師ニ誕生。天保九年十月廿八日叙從五位下(十四歲)全年十二月十一日元服聽昇殿。天保十二年六月十四日叙從五位上。弘化二年二月十八日叙正五位下。嘉永七年三月廿日任侍從(三十歲)全年六月十日叙從四位下。安政二年九月二日爲和歌御會御人數。安政三年正月廿五日爲和歌御會座御人數。安政四年正月廿五日叙從四位上(三十三歲)。全年十二月十九日爲近臣。萬延元年十二月廿九日任右近衛權少將。文久元年正月五日叙正四位下(三十七歲)。全年七月廿六日拜賀。文久二年五月十五日轉右近衛權中將。全年七月廿八日依願所勞本番所參勤。全年八月廿日依願辭中將。全日勸勤發居。全年九月廿二日依願辭(法名友山)。全年九月廿五日被止洛中住居(山城國愛宕郡岩倉村住)。文久三年正月十三日重價ノ旨被仰出。慶應三年三月廿九日自今被仰入洛住居洛外ノ事(但月々一度計歸宅不苦一宿ノ外不相成候事)。全年十一月八日自今歸宅可爲勝手被仰出候事。全年十二月九日被免勸勤復職。全年全月十七日議定職。明治元年二月某日副總裁。全年全月十七日兼海陸軍務會計事務總督被仰出。全年全月廿二日任右兵衛督。全日叙從三位。全年四月廿一日是迄ノ職務被免更ニ議定兼輔相被仰出候事。全年後四月廿日被免當職依格別之思召自今御前日參被仰出。全年全月廿五日依別段思召御前日參被仰出候事共今般御草正機務多端ニ付更ニ議定兼輔相被仰出。明治二年己丑正月十七日當職辭退之義難被聞食屆候得共病弱難避之慮ニ付不被爲得已願之通輔相被免議定之義乍大義是迄之通力疾勤仕可致旨被仰出(但並列可爲議定第一席)。全年正月廿五日大納言大將位宣下之義昨年奉慶御沙汰有之候得共再三固辭ニ依リ權大納言正二位推任叙宣下候事全日叙正二位。全年二月十一日於浪華表奏御殿下賜。全年全月十四日至急御用有之早々歸京可致旨被仰出候事。全年四月十三日當官ヲ以テ行政官機務取扱候條被仰出。全年七月八日任大納言。全年九月廿六日左ノ勸勤ヲ賜フ 汝具親皇道ノ衰ヲ憂ヒ大ニ恢復ノ志ヲ抱ク竟ニ太政復古ノ基業ヲ輔ク躬ヲ以テ天下ノ重ニ任シ夙夜厲精如畫圖而以テ中興ノ業ヲ成ス詢ニ國ノ柱石股ガ股朕朕切ニ厥偉勳ヲ嘉ニス乃チ賞賜シテ厥勞ヲ酬ニ嗚呼將來輔道益望ムコトアリ汝具親其悲哉 高五十石ノ俸勳永世下賜候事。全年十一月廿三日兵部省事務掛被仰付。明治三年四月某日被免。全年七月十日民部省御用掛被仰付。全年閏十月五日被免。全年十二月三日山口鹿兒島兩藩ニ勸使被仰付並勸勤左ノ通 方今ノ形勢前途ノ事業實ニ不容異議ニ付毛利從二位島津從三位上京殿ヲ輔翼太政ヲ贊成シ兩藩一致戮力諸藩ノ標準トナリ大ニ皇基ヲ助ク候條朕カ旨ヲ傳ニ誠意貫徹候條盡力可致令委任候事 明治四年二月六日歸朝復命。全年七月十四日任外務卿(四十七歲)。全年八月十八日全邸親臨左ノ勸勤ヲ賜フ 一新以來日夜隔隔聞治今日ノ盛業ニ到ルモ汝具親功

居多ナリ依テ親臨シテ以テ其功勞ヲ謝ス 全年十月八日任右大臣同日爲特命全權大使歐米各國ニ被差遣。同年十一月十二日歐米各國ニ向ケ揚陸。明治六年二月十三日喪父在英御用中不其其期(四十九歲)。同年全月二十日家督被仰付。全年九月十三日歸朝復命。全年全月廿三日依願喪父爲退祭一週日ノ暇下賜。全年十月廿日親臨左ノ勸勤ヲ賜フ 國家多事ノ折柄太政大臣不慮ノ病患ニ罹リ朕深ク憂苦ス汝具親太政大臣ニ代リ朕ヲ輔ク國家ノ義務ヲ舉ク兼庶安堵候條勉勵努力セヨ 明治七年一月十四日赤坂噴煙ニ於テ遷變。全年二月廿三日依快氣出仕。全年全月廿七日病後ニ付日勤ニ不及候得共精々相扶ケ御用ノ節々出仕候條御沙汰ノ事。明治九年五月八日與羽御巡幸奉被仰付。全月十八日叙從一位。全年九月四日於橫須賀巡幸船中御式ノ節御名代被仰付。全年十二月廿九日明治勳章ノ勳一等ニ叙シ旭日大授章ヲ賜フ。全月卅一日督部長被仰付。明治十年一月廿四日西京ニ行幸ニ付左ノ勸勤ヲ賜フ 朕西幸ノ間親ク政ヲ視ルコト得ズ凡百ノ事具親ニ委任ス爾具親其朕ガ意ヲ體シテ之ヲ所分セヨ若シ夫レ重大ノ件ニ至ラハ一々之ヲ行ニ以テ聞シテ裁テ之ニ事ノ緊急ニシテ稍緩スベカラザル者ハ便宜所決シテ後其事出テ以聞スヘシ 明治十一年八月三十日北陸東海兩道御巡幸奉被仰付候事。明治十五年十月督部長被免。全年十二月某日叙大勳位。明治十六年五月西京宮殿御存御用ヲ西京ニ出張同年六月歸京。同年七月五日親臨病氣御慰問アリ。同年十二月皇后宮邸ニ行啓病氣御慰問アリ。同月十九日依願免本官但可稱前右大臣座次可爲如舊事。同月同日親臨病氣御慰問アリ。同月廿日薨去享年五十九歲 今右大臣岩倉具視公薨去シテ明治天皇陛下ハ其股肱ノ重臣國家ノ柱石ヲ失ハレタリ蓋シ明治政府ノ基礎既ニ鞏固ナル今日ニ於テ佞令一ノ柱石ヲ失ヒタリトモ政府ノ大体上ニ於テハ格段ノ影響アルベカラザルハ勿論ナリト雖モ政府ノ大小事務中公ガ生計ニ計畫シ盡シ其實施ニ銳意盡力アリタルモノ甚ク少ナカラズト云ヘバ公ノ薨去ハ夫等ノ事務ノ維持實行ニ影響スル所決シテ少ナラザルベシ公ノ生死ハ明治政府ノ政治歴史ニ一大期限ヲ遺スモノト云フモ不可ナカルベシ讀者ハ本日以後政治海裏ニ向テ其影響ノ如何ヲ徵セヨ

○岩倉前右大臣薨 同前右大臣の病弱且夕お迫りしは付 聖上の臨御を以て御慰問ありしほどは昨日の紙上 お記したるが一昨夜十時頃には餘程快氣を覺へられし模様 みて看護の人々へ梨實の汁を和したるアイスクリームを 限り度旨を望まされければ早速調製して参らせし最と 心地よけお嘆せらるる其後至て無事の休息されし處昨晩より 又々容体悪しく秒を退めて重らせられ醫官の人々の種々 治療を忍せさせざりしも終り其効しるる陸手哀哉五十九 九七一期ともし午前七時四十五分薨去されたり一家 並ぶ親戚の悲嘆は申も申されたるかにて同邸より直に宮

雜報

○岩倉前右大臣薨 同前右大臣の病弱且夕お迫りしは付 聖上の臨御を以て御慰問ありしほどは昨日の紙上 お記したるが一昨夜十時頃には餘程快氣を覺へられし模様 みて看護の人々へ梨實の汁を和したるアイスクリームを 限り度旨を望まされければ早速調製して参らせし最と 心地よけお嘆せらるる其後至て無事の休息されし處昨晩より 又々容体悪しく秒を退めて重らせられ醫官の人々の種々 治療を忍せさせざりしも終り其効しるる陸手哀哉五十九 九七一期ともし午前七時四十五分薨去されたり一家 並ぶ親戚の悲嘆は申も申されたるかにて同邸より直に宮

内省へ具實の 兩皇后宮へ其 の奏上をも聞 御覺悟任給給 さて 聖上よりハ皇族大 邸ありて吊詞 名を増加して 右府も此を身 身後の事を慮 くの談話あり ざるに豫て伊 より歸朝すべ 九海程期あり の日子を終焉 諸達欄内にお 死刑を行ふに 備はれん 前六時出棺 合せるよ 紙上登録 〇右大臣の を缺き機務 請を允し玉 然るも右 臣具親庸庸 臣具親庸庸 夜輿躬シ ナリ伏シ 遠ク 鶴業未大成 列ニ就キ 位兩ツナ 權勢ノ列 〇知遇ナ 臣ナノ得 セシメ 前キニ 聖恩ニ 重キニ 臣心ニ 若聖明 〇ハ臣亦 尺ノ間